

第33回日本ジオパーク委員会議事録

日時： 2018年3月12日（月）14：00～17：00

場所： 砂防会館 別館B 3階「霧島」

<委員長>

尾池和夫 京都造形芸術大学学長 (日本地震学会)

<副委員長>

中田節也 東京大学地震研究所教授 (日本火山学会)

<委員>五十音順

欠 浅野真希 筑波大学生命環境系助教 (日本第四紀学会)

欠 阿部宗広 自然公園財団専務理事 (関係団体)

大野希一 島原半島ジオパーク事務局専門員 (日本火山学会)

欠 菊地俊夫 首都大学東京 都市環境科学研究科教授 (日本地理学会)

佃 栄吉 産業技術総合研究所 特別顧問 (日本地質学会)

中川和之 時事通信社解説委員 (日本地震学会)

成田 賢 全国地質調査業協会連合会会長 (関係団体)

橋詰 潤 明治大学研究・知財戦略機構特任准教授 (日本第四紀学会)

平田大二 神奈川県立生命の星・地球博物館館長 (日本地質学会)

欠 宮原育子 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授 (日本地理学会)

<顧問>五十音順

伊藤和明 防災情報機構特定非営利活動法人会長

欠 小泉武栄 東京学芸大学名誉教授

高木秀雄 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

町田 洋 東京都立大学名誉教授

<UNESCO 世界ジオパークカウンスル委員>

渡辺真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門地球変動史研究グループ長

<日本ユネスコ国内委員会>

小林洋介 文部科学省国際統括官付国際戦略企画官

秦 絵里 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

齋藤 彩 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順・省内五十音順

遠矢駿一郎 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局主査
渡辺大輔 内閣府地方創生推進事務局参事官補佐
土屋 常 内閣府地方創生推進事務局
松本直美 外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官
上野康史 林野庁森林整備部森林利用課森林環境保全班 森林生物多様性専門官
二井内 学 経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室
三宅里奈 観光庁観光地域振興部観光資源課課長補佐
越田弘一 気象庁地震火山部火山課 火山防災情報調整室 噴火予知調整係長
松平定憲 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長
松本良一 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室環境専門員

<事務局>

斉藤清一 JGN 事務局長
下平明彦 JGN 事務局次長
古澤加奈 JGN 事務局次長
宮崎博子 JGN 事務局員

<報告事項>

委員長：お集まりいただきありがとうございます。3.11 から7年経ち、霧島がまたと色々起こっている。ジオパークマガジンも充実した誌面になってきた。全国大会報告書も写真の撮り方が随分上手になり、人数が増えているのにきちんと顔がわかるようになっている。では、早速報告事項から。事務局から説明を。

事務局：ユネスコ世界ジオパーク再認定審査結果は、ずいぶん長く待って、日本時間2月1日の夜遅くにユネスコ本部から再認定審査を受けた4地域への通知が来た。JGC のメールアドレスにもCC で来た。翌2月2日にJGC のウェブサイトにも10:00 に掲載するという形でリリース行い、同日JGN のメールニュース、ウェブサイトにも掲載した。結果は洞爺湖有珠山が2年間の条件付き再認定イエローカード、糸魚川、島原半島、隠岐が再認定、グリーンカードであった。

顧問：ずいぶん時間がかかった。9月の半ばにはジオパークカウンスルを開いてそこで決めた。ジオパークカウンスル委員で議論をして議事録が上がったのが11月15日くらい。そこからさらに2か月ちょっとかかった。ワークライフバランスを重視するユネスコなので、クリスマスからお正月はあまりお仕事をしないということもあると思うが、以前であれば、9月の委員会の審査直後に再認定になる地域は結果を聞いて、そこから準備が始められた。3、4か月後になるということで、もともと2年しかないのが短くなるので、今後ジオパークカウンスルの方でも、条件付きの認定

の場合2年が妥当なのか、と言うことを問題提起しないといけないと思っている。

委員長：2年が妥当なのかという点をもう少し詳しく。

顧問：例えば3年にするというのを考えてもいいのではないかな。現在でも2年でイエローが出た後、どこも短い期間でたくさんのことをやっていて、素晴らしいと思うが、気の毒。それがさらに短くなっている。再認定はいじめるためにやっているわけではなく、良くなってもらうためにやっている。良くなってもらうために十分な時間が必要だという気がする。

委員長：2年だと頑張りすぎて疲れてしまって後が持たない、そういうことはないか。

顧問：あるかもしれない。

委員：9月から2月までかかってしまうという期間を短くするのは現実的に難しいか。

顧問：日本人と働き方が違うところがある。

事務局：ユネスコの公用語が英語とフランス語なので、議事録を作るのにフランス語化に時間がかかるという説明もあった。

委員：いつから2年なのか？ 審査をした時期からなのか、書類を出した時期なのか。

顧問：例えば今回のケースでは、2017年9月に審査が終わっているが、2018年の2月に通知を受け取った。そして、実際には2019年6月か7月には現地に審査員が来る。なぜ6月7月に来ないといけないかという、毎年カウンスルが秋にあるから。2年と言うが、実質的には1年半あるかないかでやらなければならないということになる。

委員：11月の執行委員会に間に合わせればいいのでは？

顧問：再認定審査の部分だけ議事録を先に上げることができればそれは可能かもしれない。それが可能かどうか、そもそも執行委員会にどういう形で議題をあげるかを誰が決めるのかよくわからないが。

委員：再認定審査は執行委員会で Endorse している訳ではない。6年3年なら分かるけど、もう4年に一度と決まっていることなので、4年3年ではおかしなことになる。

顧問：カウンスルの後、あるいは10月11月に発表できないかということですね。そういうことも含めて問題提起をしてみたい。

委員：他の国の状況、イエローの発表の時期についての意見や情報交換はあったか。

顧問：特にない。聞いたら、意見は出てくるかもしれないが、聞いたことはない。

委員：日本としてきちんと提案をした方がいいのではないかな。再審査までにたった1年しかないのに対応は不可能だと。今の仕組みをしっかりと考えないといけないという意見書は出せるのではないかな。素案をJGCで作って、ユネスコ国内委員会から出してもいいのでは。

委員長：ちょっと考えましょうか。

委員長：次は、認定取消しおよび条件付き再認定地域への支援について。

事務局：12/22の前の委員会で条件付きの地域、認定取消しの地域が出ているが、その後の対応について報告する。認定取消しとなった茨城県北について、1/31に現地審査員2名、事務局4名で現地に行って説明会に参加した。佐渡には2/10に委員が現地に行かれた。三陸は2/16に市町村長が集まって会議を開き今後も継続するという意思決定をしている。要望として日本ジオパークネットワークに対して、専門家、もしくはジオパークのことを説明できる人の色々な説明会等への参加要請が来ている。日本ジオパークネットワークとしては、この要請に応える形で新年度か

ら対応をしていきたい。3/7-9 三陸の中にある3つのブロックで担当者会議を開き、今回の委員会からの指摘に対してどのように対応して行くかアクションプランの策定に入った。JGNからは次長が現地に行っているが、新年度も延長することになった。

委員長：茨城県北の現地審査員の方、報告を。

委員：1/31に現地で説明会を行った。約70人と大変多くの方が参加していた。インタープリター、県議1名、支援企業、会長はじめ協議会メンバーが来ていた。当初は意見交換しようという話だったが、事前に質問を募集していて、8名から来ていた。熱気を帯びた形で質問者が説明をして、それに対して我々が答えるという形でした。中には、JGC、JGNへの批判、特にインタープリターからは、ボランティアで一生懸命やっているのに何で認定を取り消すのか、努力を無にするのかという話もあった。取消しの仕方に問題があるのではないか、事前に説明をして、段取りをとってからやるべきではという意見が出た。日本ジオパークは地形遺産を尊重していて地質遺産を認めていないのではないか、地質遺産を認めていたらこういう結果にならないのではないかという話もあった。ジオ井を販売している会社の社長さんから、ようやくビジネスになろうとしたのに、これで終わるのではと言う不安も出された。弁当については、活動自体がなくなるわけではなく、日本ジオパークとしての認定が取り消されるだけなので、事務局と善後策を練ってくれという話をし、会場の方々も受けてくれた。インタープリターの人たちは、我々を日本のジオパークの活動を全て取り仕切っているというニュアンスで見ている。それに対して、実際、各ジオパークがみんな集まって全国大会等で議論し、運営会議、保全WG等を作りながら、やり方をみんなで決めているのがジオパークであって、そのことが、地元で一生懸命やっているインタープリターの方々に伝わっていなかったことが非常によく分かった。ジオパーク活動をどうやって行くのか、事務局自体が協議会を含めて、そういう活動があまりよくなされていない。余りにもコロコロ事務局の人が変わったり、継続的な活動をしてないことでこういう状況になったと我々から説明したら、大変納得されたような雰囲気でした。でも、せっかくここまで作って来たのでやっていきたいと熱意を出された。会長からは、会長自体が非常に不手際があったと会場の皆さんに謝罪をされ、会長としては再度チャレンジをしたいという話があった。雰囲氣的には、参加者は今回の状況はうすうす納得していたし、もう一度やろうという意識が感じられた。

委員長：ありがとうございます。何かありますか。

委員：今年度途中で採用された専門員とも話をしたことがあるが、今の報告にあったように、もう一度動かしていこうというニュアンスを感じた。ただ専門員の任期も長くない中で、本当に継続して行くことが可能なのだろうかと思った。

委員：再認定審査の後、事務局が危機感を持ち、これからどういうふうにするか話し合われたことを文章で我々に送ってきた。事務局体制を変えるなど、相当前向きな話を事務局の中でしている。自治体と大学ということで、今までかけ離れていたが、事務局を各自治体に1、2人ずつ置きながら、その統合体としての事務局を作るといった非常に建設的な意見も出されてきた。なぜそれをもっと早くやらなかったのかと聞くと、時間がありませんでしたという返事があり、ではこの6年間をどういうふうにするのかという議論になった。先ほど世界ジオパークの再認定の話にもあったが、2年間は短すぎると。しかし、その前に最初の認定審査時の宿題すらやっていないのではという話にもなった。2年は短かったというのは茨城県北の事務局からも出ている。特に、水戸と大洗町を会員に入れるために1年かかり、さあやろうとなったら、もう再認定審査だった

という話はされていた。そういう面では、時間的にはタイトだったところはあったと思う。

委員長：説明会の参加者は、どういう方々だったのか。

委員：自治体の方 25-26 名、インタープリター 25-26 名、大学関係者 15 名、県会議員 1 名、企業の方 4 名。

委員長：大変熱心な銀行の方も？

委員：来られていた。

委員長：茨城新聞は？

委員：茨城新聞は来ていない。

委員長：委員会の取材の際に、茨城新聞が来ていないのが問題だと以前言った。地元の関心の度合いが重要だと言ったが、来なかった。

委員：条件付きの時の審査に行ったが、ネットワークの特性をあまり活かしていないこと、他のジオパークのことを良く学んで自分たちの事業や仕組みに反映させてほしいと指摘した。それまでは、全国大会や JpGU にもほとんどの人が参加していなかった。大学の先生と数名のみだった。インタープリターの方たちは条件付きが出て初めて外に行き行って学ばないといけないと知って、それから複数の方が来るようになったが、そのレベルでは追い付かなかったのだろう。「前もってちゃんと伝えてくれ」という話をしているのであれば、条件付きで出した時の指摘には含まれているので、会議の場でそういう発言が出るのは残念。

委員長：やはりパイプが繋がっていないということ。

委員：最初の審査結果報告書にも同じようなことが書いてあったが、それをちゃんと理解していないことが、まず最初の問題。

委員長：今後の見通しは？

委員：まだ結論は聞いていないが、協議会段階では 1 年ぐらい後に再度、認定申請をしたいという流れになっていると聞いている。

事務局：この説明会の後に運営会議が開かれ、継続の意思確認はしたということだが、これから JGN への要請、お願いをしていきたいと言っていた。まだ具体的には何も来ていない。

委員：事務局体制の検討は？

委員：運営委員会レベルでは議論をしているが、その次の協議会レベルではまだ議論をしていないという話だった。協議会で認証されれば具体的に動き出すのではないかと思っている。

委員長：大学関係から何かコメントはなかったか。

委員：大学はあくまでも大学に事務局の中心を置きながら、自治体の協力を得てやりたいという意向を持っていた。学長がそのように言っていた。インタープリターの所属している市町村にジオネットというものがあり、そこが今非常に緻密に活動をしているので、そこから、事務局員を各市町村から出してもらって、そのトータルとしてやりたいというのが今の構想。もう一つは、茨城県が非常に強くバックアップしており、県会議員もこのジオパークをなんとかしたいと言っている。この辺が動き出せば、大学だけでなく自治体も動き出せば、動きが変わって来るのではないかと思う。

委員：1 度目の再審査では自治体の方は出てこなかった。北茨城市だけだった。あとは全くノータッチだった。今回の説明会に 15 人くらい自治体の方がきたのは、やっと分かってきてくれたのかと思う。

委員長：次は佐渡の報告を。

委員：2/10 に佐渡ジオパークに行き、審査結果の中身とその背景の説明をしてきた。参加者は 10 名程度で、協議会会長と事務局長、執行部メンバー、運営会議のメンバーで話をした。会長の思惑と、事務局の思惑がずれていた。事務局は指摘されたことに対して、タイムテーブルを決めて計画を作り、計画ができてから動こうとしていた。私と会長で、それでは間に合わないという話をした。期限を決めるにしても、優先順位を決めてやっていかないといけないと。3つの遺産をどうしていくかについても、基本的には共存するとしても、それぞれの目的や意図を明確にした上で、それぞれのストーリーを結びつける必要があると。会長は、ジオパークは「風呂敷」であり、それが農業遺産も世界遺産も包むものというコンセプトの話をされていた。それは私も気に入っていて、そういう考えであれば、すべてジオパークでできるはずなので、早急にストーリーを作って欲しい。それを基に観光動線やサイトの再設定を決めて行けば、すべて基盤整備ができる。優先順位を決めて最初にそれをやれば将棋倒しに対応が図られていくはずだと伝えた。その中で、ジオパークが今何を狙っているか、昨年5月に JpGU で私が話をしたこと、結果的に島原半島と佐渡は似ていて、事務局は頑張るが、他が一步も二歩も引いて傍観している、そうになってしまうと終わりだと伝えた。地域の盛り上げを広げるための実例を、糸魚川や室戸の事例を紹介して、佐渡では何ができるか考えて欲しいと伝えた。事務局長が相談事で頻りにメールをくれるようになった。忌憚なく相談してくれるようになったのは良かったが、「日本のジオパークの情報公開の仕組みは？」とか聞いてこられ「それは、皆さんで考えること」と伝えた。何とかしたいという気持ちは伝わってくるので、引き続き問合せに関してはフォローしていきたい。

委員長：ありがとうございます。ジオパークは風呂敷というのはよいが、大風呂敷ではちょっと困る。

委員：結局3本柱の事務局がバラバラで、その辺はどうする話になったのか。私がたまたま行った時に「金山の中はジオパークではないので入らない。行きますか？」と言われて腰を抜かした。

委員長：それはどういうことか。

委員：ジオパークのところを見に行く時に「金山の中は入りますか？」とわざわざ聞かれた。中はジオパークの施設ではないので、山を見たりはするが、中を見るのはジオパークの所管に入っていないので、わざわざ聞いている。何を意味しているのかわかり、腰を抜かした。

委員：未だにそれは続いている。農業遺産、世界遺産の担当課の方も、その会議に入っていて、連携しなければダメだ、連携できるからしてくださいと言ってきました。でも実態としてまだ動きがない。自分が行った時も港は世界遺産一色、たまにジオパーク、農業遺産は全くないという状況でした。偏った情報発信を少しずつ変えてくださいと言ってはいる。

委員：組織を変えらるというのは、この前の再認定の報告書を読んで、そのように必要性を理解しているが、現地はそのようには理解していないのか。そうであれば、そのまま放っておいてはまずいのではないか。ここで組織を変えないで、縦割りのままで良いという認識になってしまうと、ストーリーだけでできて、やる人はバラバラになってしまう気がする。

委員：そこは気をつけないといけない。

委員長：どういう風に誰が気をつける？

委員：今後のフォローアップの時に現状をこちらで聞いて、実際どういう状況か、特に世界遺産の

担当課とジオパークはまだセクションが違う。それらの人たちとどのくらい交流があるかヒアリングをする。

委員長：当面は委員と忌憚のないメールのやりとりに頼るわけか。

委員：アクションプランが提出される時に我々もチェックして、その中に、組織見直しが入っていないければ、このままでは2年後はないと言えるように合意形成しておけばよいのでは？

委員長：では、アクションプラン提出が次のチェックすべきポイントということ。

委員長：次は三陸の報告を。

委員：私は現地には行っていないが、1月末にJGN事務局で三陸の事務局の方々と話をした。条件付きとなったときに、我々の感触とちょっと違っていてびっくりしたが、かなりがっかりして意気消沈した人が多かったとお聞きした。現地審査では、かなり厳しいことを言ってきた。すんなりと再認定にならないだろうというようなニュアンスで語ってきたので、それなりの覚悟があったと思っていた。協議会会長は、すぐに責任を取って辞めると言い始めている。会長が頑張っているのに、他の自治体がついてこないのも、ドカンと言ったようだという話もある。指摘事項の重要なところは、事務局体制。特に広域のジオパークを運営する、それなりの体制が必要と言うことが大きな指摘だった。方針として協議会会長は、知事にする方向で調整をして、知事もそれは納得している状況。3県にまたがるので、青森、宮城も入るが、全体として岩手県の知事がガバナンスとして、しっかりやる、号令をかけるということ。具体的に決定はされたかどうか分からないが、4月以降に方針を示されると思う。事務局も充実させたり、色々JGNにも要請がきているようだが、そのように体制を整備して行きたい。広域であることの問題、各自治体で取り組みに差があり、バラバラである。看板一つとっても問題がある。まだまだ準備が足りない部分もあるので、事務局としては、「どんどん足を運んでやって行きたい、すべての自治体に足を運んでやって行きたい」と言っていた。三陸ジオパークとしての理念と行動方針が共有されるようにして行きたということだった。これも、具体的なアクションプランを待ってアドバイスをしていきたい。ジオパークを継続して発展していく決意は固めているので、支援していきたい。

委員長：記者会見の時に聞かれたので、岩手県知事がもっと頑張らなければと言っておいた。それは記事にはならなかったが、記者が知事にインタビューに行ったと聞いている。少しは意識していただけたかと思う。

委員：学術部会といったものがあり、JGNから次長、最初はJGCから私ともうお一人が、学術委員のところに入って支援をし、今も私は残っている。アクションプランの改善計画素案も来ている。JGCとしては、継続的に支援をするという意思決定をしていると思うので、現地審査に行かれた委員とも話をさせていただき、私の方からもアドバイスをしていけばよいと思っている。今の段階で言うべきことを言うておいた方がよいと思う。

委員：色々と思いを三陸の方にお伝えして来たが、三陸は、もう復興を卒業するタイミングにどんどん来ている、今後復興後の三陸の姿を見せていく時期にあるので、ジオパークをうまく使って、新たな三陸というのをうまく作りあげてもらいたい。かなり高いハードルですが、世界を目指してくださいと伝えた。世界は、三陸がジオパークとして発展していくことに期待していて、三陸からのメッセージを期待しているので、世界を目指すべきであるし、世界から支援してもらった責任を果たすことでもあるので、目指してほしい。世界を目指し、しっかりとロードマ

ップを作って進めていくのがよいと考えている。そういう面でまたアドバイスもして行きたい。

委員長：JGN から派遣している方は辞められるのか？

事務局：もう 1 年延長された。

委員：現ジオパーク推進員が色々と苦勞もされて来たが、転職される。その後の見通し、よりよい人材を発掘するだとかは、どうなっているか。任期付きでは済まされないと思う。ある意味でマネージャー、プロデューサーみたいな人と、もう少しいろいろなことが見える質の高い専門員等配置が求められると思うが、その辺は現地のニュアンスはどうか？

委員：事務局体制については、かなりしつこく申し上げたので、理解してもらえたと思う。ジオパークをやるのは、とにかく人なので、上から下までいい人材をそろえてくれるよう伝えた。具体的な人的配置、いい人材を確保するための方策を含めて具体的にはまだ聞いてはいない。

事務局：現推進員の後任と既に退職された方の後任に 1 人増員して 3 人を公募中。ただし、任期付で最長で平成 33 年まで 1 年毎更新での公募となっている。

委員長：ありがとうございます。

委員長：では、その他の活動報告ということで、私の方から一つ。日本学術会議は、今年も私が前年度の外部評価をやる有識者の会議の外部評価の座長をやっている。先日も会長たちとやり取りをしてきた。日本学術会議には 2000 以上の学会が入っている。全体を見渡すような活動をする中で、例を 3 つ挙げておいた。一つは、ビッグデータの取り扱い。あらゆる分野でビッグデータの分析が行われようとしているので、学術会議としてしっかりリーダーシップを発揮してどういう風に未来に持っていけるかしっかり考えなくてはならない。もう一つはジオパークを例に挙げた。ジオパークはあらゆる分野が関係するものであり、これから未来に向かって日本の大地を理解していくために必要なもので、かなり多くの分野にまたがって学術会議がリーダーシップを発揮して議論をして進めていくべきではないかと提案した。もう一つは、原子力の平和利用は学術会議が勧告して始まった話なので、全体として未来をどう考えるかをしっかり議論していかなくてはならない。その 3 つを例に挙げて学術会議の広く見渡すための仕事に積極的に取り組んで欲しい。4 月の総会に私が報告をして、会長がこれからの活動方針を報告する段取りになっているのでご報告します。

委員：今のお話で今後どのようなことを我々が思っておけばよいか。

委員長：私の発言が公的な報告書として内閣府に保存されるので、そういう報告が外部評価であったということを、適宜、必要になったらお使いいただければよい。記憶に留めておいていただければ結構。

委員：学術会議におけるジオパークの窓口として IUGS 分科会があって、JGC 委員も 2 名いて、4 月からは 3 名になる。下から火を付けることになれば、そこが機能する必要がある。会長の方針次第だが、連携できるようなことをやりますか？

委員：ジオパークについて、学術会議で今までちゃんと議論をすることはなかった。第 3 部の地球惑星科学委員会と IUGS 国際分科会で議論をしているだけ。ジオパークはあらゆる分野に関わってくるということで、学術会議の中でも、1 部と 3 部が連携して、いろんなことをやらなければならないと思うが、下から上げて行くと、かなりのヒエラルキーがある組織なので、簡単には進まない。トップダウンでやっていただくと、全然スピード感が違う。

委員：以前の委員長の発言は地震学会の理事会でも紹介をした。引き続き、積極的なお話をしてほしいというお願いをする。

委員長：他になければ、これで報告事項は終わります。

<洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークの再審査>

委員長：議題1の洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークの再審査について、まず説明を。

事務局：洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークは、先ほどの報告の通りイエローカードということで来年の夏にユネスコの再審査があることが決まっている。JGCの審査は、世界の地域に関しては、世界の審査の前年度に審査をすることになっているので、今年の夏にJGCの審査を行うことになる。この件については、MLでもいくつか意見が出されていたが、通常の審査でよいのか、簡略化できるところがあれば現地と相談して進められないかという意見もあったので、その辺りも踏まえ洞爺湖有珠山の事務局とも話を詰めてきた。審査書類はいずれにしても整える必要があるので、準備をしたいとの意向。現地審査も今年夏に行うが、関係者を総動員するような大規模な審査ではなく、なるべく少人数で、現地の関係者と審査員がじっくり相談できるような時間を持てるような審査を希望している。その辺りを議論していただきたい。

顧問：イエローカードが出た理由の一つは、地球科学者を雇用していないということがあったが、前回のグリーンカードが出たときに色々注文がついていた。それらをほとんどやっていないのではと印象が悪かった。例えば、昔から様々な展示施設、博物館施設があるが、審査員はジオパークとの連携が相変わらず無いように見ていた。その辺りがすぐに解決しないといけないところだが、審査員が言ったことを担当者がよく分かっていないので、この意図を説明はできる。一つ審査の中の雰囲気を言うと、あのジオパークを訪れたことのある人は何人もいて、世界一のことをいくつかやっていると。でも、できていることと、できていないことの差が激しいという印象を持っている人が多かった。

委員長：施設と連携が少ないというのは、見えているとおっしゃったが、実際そうなのでは？

委員：マイスターの方々は最初防災の担い手という認識で、ガイドの担い手という認識があまりなかったが、ようやくガイド部会が出来た。そういう新たな動きもあるが、審査ではあまりうまくプレゼンできてなかったのかもしれない。地球科学者の雇用プラスその問題があるのではないかという印象を持ったが、どうなのか。

顧問：イエローカードの指摘事項はたくさんあるが、ガイドがどうこうというよりも、見えるところの問題点の方がたくさん指摘されている。ビジターセンターの展示が不十分、遺跡のところでもジオパークとの関係性が見えない等。また、野外のサイトで一部アイヌ文化が紹介されているが、ビジターセンターに行ったらアイヌ文化が説明されていない。北海道はアイヌと自然との関係を見せるのが大事なのに見せてないと指摘されている。

事務局：もう一つ、計画が不十分だと指摘されている。自己評価表で、計画に含むべき項目をチェックしていくが、含まれていない項目が審査員とのディスカッションの中でも明らかになり、指摘事項に書かれている。

顧問：地球科学者を雇っていないことが一つのイエローの理由だったが、関わっている北大名誉教授たちのバックアップ体制はどう評価をされているのか？

顧問：基本的には毎日誰かがいることが条件。

委員：現状予算の中で雇用することは大変だという話を聞いたことがある。人を雇用することにお金を使って他で削減する等いろんなやり方があるので、そこは地元で考えなければならぬと誰かが指摘していて、そうだった。

顧問：外から来た人には一大観光地に見える。審査に来た人は、そんな一大観光地で、火山で食べていて、皆で出し合って火山屋一人雇えないのかと疑問に思う。事前の提出書類にも、年間何百万人と書いておられると思う。一人1円集めれば、一人雇用できるだろうと見えてしまう。やはり、その価値を認めていないからとしか見えない。

委員：まさにそう。ジオパークとしてやるに当たっては中にそういう人がいるのが大事となぜ私たちが言っているのか、10年経ってもよく認識されていない。やっぱり雇用していないということは、ジオパークがあまりよくわかっていないという判断につながったのではないかと思うが、どうか。

顧問：そうだと思う。これだけ火山で稼いでおいて火山学者一人雇えないのかという空気だった。

委員長：以前は北大名誉教授が目立っていたが、その後がない。その次が出てこない。

委員：持続性を考えると、今の支援体制では不十分。だが逆にそれだけが問題であるという書き方を新聞でしていたが、他にもたくさん課題があるのに、それだけにフォーカスしているのは、まだまだ理解していないと感じる。

委員長：火山マイスターの人たちは相変わらず活躍しているようだが。有珠山の長期予測に関してはどうか？

顧問：有珠山の場合は、1910年、1944-45年、1977年、2000年。平均すると30年未満。だから有珠山は折り返し地点を過ぎているだろうと私は見ている。

委員長：それについては、現地のジオパークのコメントはどうなっているのか知りたいと思う。夏に向けて、こちらは準備しなくてはいけないが、今のところはその程度でよいか。新年度の委員会が始まってから決めると。

事務局：手続きとしては4月には報告書を出してもらおう。アポイ岳と室戸もそういう予定で、そろそろ告知しないとイケない。同じスケジュールで大丈夫かと思うが、どうか。

委員：国内審査だが、それだと前の審査に対する報告書になってしまうのではないか。ここで問題にしたいのは、次の世界審査にどう臨むかというところ。だが、実質まだ何もやっていない。だから報告書を書かせても実は仕方がないかとも思う。ないよりはマシだが。

事務局：それは洞爺湖の事務局も認識していて、指摘事項に対してどう取り組むかの方針を示す程度の報告書になる。

委員長：結局何か出してもらわないと、こちらでもアクションできないので仕方がない。

委員：再認定審査は、日本ジオパークとして引き続き認めるかどうかということもあるが、我々としては、ユネスコに対して、「ここは世界ジオパークの価値が引き続きあるので、ぜひちゃんと認めてください」とカバーレターを書くための根拠が必要なので、彼らがちゃんとわかって答えてくれたら、それでカバーレターを書けるとは思う。そういう認識で良いか。

顧問：はい。

<申請・報告様式等の決定>

委員長：議題2は、申請・報告様式等の決定。

事務局：資料2をご覧ください。前半の新規の申請要領に関しては、用語を統一しただけで昨年度定めたものとほぼ変わっていない。後半にプログレスレポート様式というものがある。これは、昨年8月にユネスコの方で再認定審査の際のプログレスレポート、日本では「現況報告書」と言ってきたものの様式がようやく定まった。タイトルだけ日本語に訳した。また、日本の再認定審査の際に防災・安全対策という項目を追加したので、この項目をこの様式にも追加した。この様式で、世界地域のレポートを出してもらうことを提案します。

委員長：最初の方はほとんど変わっていないということだが、そこに関して何かご意見その他ありますか。

委員：アポイと室戸はこれで良いように思うが、洞爺湖はこれで間に合うように出してもらって良いのか？ ユネスコにはいつ出すかタイミングも決まっているはず？

事務局：来年の2/1がユネスコへの締め切りになる。これの英語版の提出。

委員：洞爺湖有珠山に対しては、これを出せというのは厳しいようにも思うが。

事務局：プログレスレポート様式に前回の指摘に関する取組改善点という欄がある。洞爺湖に関してはこの改善点に重点を置くのであれば、可能と考える。また、「結局ユネスコに提出することになるので、二度手間にならないようにしたい、今回の提出も可能」と現地事務局も言っている。

委員：地元が出せるというならいいと思う。ただ、取組改善点のところは、再認定審査の際に意見交換もして、JGCとしてカバーレターを出すのに相応しいようなものにしてもらってユネスコに提出するということになるかもしれない。我々がそのように判断した場合には。

委員長：取組改善点に関しては、実例と写真をつけて説明するようになっている。どういようなものを出す予定かも今年の審査で議論をしていただかないとしょうがない。出せるものを出していただくしかない。日本独自のF. 防災・安全対策は、出すときは英語でつければよいか？

顧問：ユネスコに出すときには、その他か、教育活動とかに分けて入れてもらえば良い。

事務局：去年の日本の再審査では、この様式に当てはまるような形式の現地審査報告書のテンプレートを使用した。ほぼ項目が対になっていたため、それに合わせて入れた。外した方がよければ外す。

委員：外さない方が良いと思う。いずれユネスコの議論の中で、Fの項目を正規に取り上げてもらえるように議論してほしい。ちょっと面倒ではあるが、入れておいた方が良い。先々、独立できるようになった方が、日本、アジアの国々にとっては良いような気がする。

委員長：ユネスコ国際会議の島原の決議もあるから。災害を学ぶと書いてある。意見はおいおいに言うとして、フォーマットはフォーマットですから、出すときには形の通りになるでしょうが。日本ではFも入れるということによいか。事務局はこれで大丈夫か。

事務局：世界の地域にはこれで出せる。日本語も付けて秋の日本の再認定審査に間に合うように準備をしていきたいが、それもよいか。

委員長：よいですね。

事務局：自己評価表が未定稿のままで、まだ一部調整中です。世界の再認定の3地域は、ユネスコのフォーマットで出してもらうので問題ないが、日本の新規認定申請には、今年から申請書に自己評価表を付けて出してもらうことが決定しているので、作業終了後にメールで確認してほしい。

委員：年度内にメールで決着するという事によいか？

委員長：それはメールでやりましょう。

< 審査料増額および現地審査員の減員、審査員の評価制度 >

委員長：議題 3、審査料増額および現地審査員の減員、審査員の評価制度。ご説明を。

事務局：今回の委員会の体制の見直しに伴って、委員会の開催と部会の開催が発生する。については審査に関わる費用について、増額してしまうので、これをどうしようかと検討してきた。試算をすると、今は各地域 1 回の審査で 10 万円の負担。これが倍の 20 万円になる。2/20 に日本ジオパークネットワークの役員地域の事務局長会議で報告をし、増額をしていきたいと伝えた。2018 年は既に予算化されているので、2019 年度から倍増させる方針を示したところ、基本的には了承してもらえた。ただ、増額にあたっては現地審査員を減員できないかという要望があった。今は現地審査員 3 人で審査をしているが、これを二人の体制にしてほしいという要請。世界ジオパークの審査も 2 名で行なっているの、そのような形に準じて行ってほしいというお願い。また合わせて、審査にあたっては信頼関係の構築が重要なので、そのような審査をしていこうとはしているが、中には審査員に対する不信、苦情に似たものが出る。それを表明する場がなかなかない。審査員に対して意見を言う場、何らかの意見を表明する仕組みを作りたいということ。これに関しても、ユネスコの審査に倣って、アンケート等を行いたいと要望している。ユネスコの今の審査では、配布資料のような内容になっている。内容は別途検討が必要かと思うが、基本的にはこのように、調査運営部会の部会員等が現地審査を行うことになるが、それに対する意見を述べたいということ。

委員：審査員が減るのはあまりよろしくないと思う。再認定のところで比較的いいところは 2 人とかは、やってもいいのかと思ったりはするが、全部 2 人というのは良くないと思う。いきなり 2 人という条件にはしたくない。苦情とかいう話について、審査ワーキングを作って、アクションプランについてのヒアリングとか行っていたが、結果的に続かなかった。あれをもう一度復活させるとか。かつて JGN、JGC として問題意識を持ってやっていた、審査のやり方を見直して色々やってきているので、そこはユネスコに倣ってということよりも、やっぱり必要だったと再認識して、かつてやっていたことの課題をベースに考えていただきたい。新しく作るのではなく。

顧問：3 人にしたのは私が事務局の時にした。委員 2 人に審査に行ってもらうことにしていたので、書記として 3 人にしていた。その後は、新しい審査員の養成のためでもあった。それをどうするかということだと思う。

事務局：今回 2 名にするにあたって、書記の部分の仕事がどうしても委員にかかってくるわけだが、調査運営部会のメンバーは、ジオパークの経験がある、もしくは審査員の経験があるという方がおりますので、書記の部分は特段問題ない考える。また、先程の様式の話にもありましたが、現地審査の報告書はかなり簡素化されているので、この点でも書記の仕事は減っている。審査 WG があったという先程の話があったが、現地審査を受ける地域の側からすれば、この方のこの意見に関してというものも結構ある。そういったものも基本的には委員会の方に全てきちんと伝えたいということ。WG 等になると、どうしても一部の方が集まっての議論になってしまうので。

委員：それは認識が間違っている。ある時に一部の人が集まっただけで、誰かがまとめなければいけないので、アンケートやヒアリングをしたりした。今回アンケートをやるのも同じ。だから、それを継続してやって行くというのは、別にユネスコに倣ったわけではなく、私たちはずっとやっていたわけで、個人的な負担でやるのは大変で、前に審査ワーキングの中の審査部会とかフォ

ローアップ部会を作ってやったことを事務局として継続的にやるというイメージのことだと私は理解した。だから、新規でやるというのではなく、そもそもそういうことをやっていなかったわけではなく、私たちは問題点だと思って、ちゃんと聞き取りをして、実際に地元からいろんな問題を聞き、そのために「審査にあたって」という頭書を我々で共有してきた。もちろん十分ではないこともあるだろうが、そういうフォローアップが定期的に必要だということではなるが、単にユネスコだからと言うことでなく、ちゃんとこれまでやって来た方々に大変失礼にあたるので、そこは認識が間違っていると指摘する。

事務局：わかりました。意図していたところは違ったのですが、役員地域の事務局長からの意見として、JGN 側の、審査を受ける側の方でとりまとめて、それを委員会に挙げてくれという意味合いです。これまでの WG でやって来たことがどうかという意味ではない。

委員：かつてのやり方が、何が不十分で何が足りないかという指摘なら分かるが、事務局長たちはこれまでのジオパークの部会だとか WG をどうやって来たかというプロセス、この 10 年間のプロセスを十分理解いただいているか。ごく直近のことについて、どうなのかという話が出て来るというのは、最近やっていないからだが、最初の問題提起、当時の議論の中で、審査の一方的なやり方はよろしくないという認識は持っていた。事務局長会議で費用を 20 万円にするから降ってきた話を言われても説明の仕方が十分ではないと思う。事務局長会議で、今回 JGC でこのような指摘があったということは伝えてほしい。これまでの経緯をちゃんと伝えてほしい。事務局長会議で伝えてはいたのか？

事務局：役員地域の事務局長も全てが最初からいたわけではないので、これまでの経過、審査 WG があったことをご存知ない方もいるだろう。ただ、審査に対してのいろんな意見、苦情という言葉は不適切だったかもしれませんが、いろんな意見があるのは事実であり、そういったものを委員会で判断していただきたいという話。

委員：それはもちろん悪いことではないが、これまで何もやってなかったという風に聞こえるのはそもそも問題であるし、そういう認識を事務局長たちに持たせたのは間違っている。

顧問：この説明だと今まで何もしてなかったのではないかと事務局長たちが認識しているのではないかと心配されている。これまでもやってきて、それをこういう形に変えていきたいんだということを経理局長たちに認識を持ってもらいたいということだと思う。

委員：審査員数の話だが、書記の問題だけではなく現地の人とコミュニケーションする時に 2 人だけだと動きづらいところもある。場所によると思うが、現時点で全部が 2 人と決断してしまうのはよくないと思う。

委員長：原則として 2 人だけれども必要に応じてもう 1 人ということもあるということか、それとも 3 人が良いという意味か？

委員：基本的に 3 人で、再認定のところで 2 人でいいところも出てくるという。

委員：3 人必要だった時期もあったと思うが、最近は審査の前に集まって実質部会のようなことをやり始めた。そういうのがちゃんと機能すれば 2 人でもできるのではないかと思う。

委員：再認定に関してはそう。新規はやっぱりきついのではないか。

顧問：人数が増えるのは地元には負担。トレーニングするには手薄なのでどういう形がいいか？

委員：世界の審査も全く同じで、1 人が初めてという時は結構辛い。そういうものかと。

委員：世界の場合の審査のあり方を日本でというのがいいのかとは正直思うので、やはり日本社会

でこれをやって行くのに世界の2人というのはちょっと怖いと思う。

委員長：言っていることはわからなくもないが、お金の問題がからむので、負担する側の意向で絞ってほしいと言われると説得する論理が中々難しい。分担金は今一律なのか？

事務局：1地域あたり108,000円で一律。地域の面積、人口、財政規模等これまでも検討したが色々線は引けず結局は均等。

委員長：現地審査員を2人にしてほしいという切実な声だと思うと、我々もそちらの方向に努力しなければいけないと思う。

委員：JGCとして無責任に経費がないからといって、継続的な人材育成の場になるとか審査に関わる人たちの確保は重要であると思う。

事務局：審査負担金の使途は、あくまでも委員会の開催経費を按分していくもの。現地の審査に係るものは個別に現地から審査員に支払われる。委員会に係る全体の経費をその年の地域で割っても足りなくなるということになる。現地が負担をするので1回の審査にあたって10万払うのか20万払うのかということと、現地に行ったときに1人辺り10万程はかかるのでそっちの方を減らしてくれたら負担金を倍増してもいいという意味合い。

委員：再認定地域には負担を軽減して、新規地域は従来そのままがいいのでは。

事務局：今の話だと、新規も再審査の地域も1回の審査に20万円払い、再審査は2名でいいが新規については3名で3名に係る負担ぐらいいは新規地域はするべきというお話だと思う。どうしても現地の方で来てほしいという所もあるだろう。いろんな指導をしてほしいという意味合いで審査を受けることになれば、委員を増やすという話もあるかもしれない。

委員長：色々全体を見渡した事務局の提案でしょうから原則2人で、どうしても何かの事情があれば交渉に応じるということではないか。

委員：よくない。今後を考えるとこのままでは不安。

委員長：自分で負担を考えての発言ならいいが、現地を説得できる論理ですか。

委員：日本のジオパークの活動をずっと維持していくためには、審査をある程度の基準でやれる人がある程度いないといけない。新規だけは3人で。

事務局：今後お金の話をしていく中で新規についてはという話はしてみたいと思う。どういう場合に必要か、新規だからということだけでいいのか、地域の要望等聞いて、再審査であっても地域によっては何人も来て欲しい地域もあると思う。ジオパークの審査を機会と捉えて活動を活発にするということもあり得るので、その辺は話をしたいと思う。

委員長：プラスする場合には、適当な負担減を別に用意してプラスというのは今までもやって来ているわけだが。

事務局：世界の審査においても、日本の世界審査経験者に現地へ来てもらうことは地域はやっている。同じように審査員を増やしたいという地域はあると思う。

委員長：それは別の話で、そういう地域があったら、それは認めるという話。先程の話は原則の話なので趣旨がちがうと思う。

委員：事務局長会議で要望しているのは、経費負担が大変ということを行っている。JGCも節約をしてくれと。しかもクオリティの高い審査をやって欲しいという、そういう要望をしている。それは応じるので、原則2人で、新規についてはできるだけ3人でお願いをするということではどうか？

委員長：ではもう一度、交渉の余地を残しますか。結構大変だと思いますが、負担は増えて来てい

るわけだから、それも考慮しないとイケない。負担金が一律であるのは当面変わらないと思って
いいか。

事務局：はい。

委員長：どうもありがとうございます。審査の評価に関しては、何か具体的なことはありますか？
ここにユネスコのが資料としてありますが。

委員：4-5年前にやり始め2年くらいやったが、その時の議論に関わった人たちを含めて事務局で
どういう形がいいかまとめてもらうのが良いと思う。ユネスコのをそのまま持ってくるよりも。

委員：ユネスコのはどのように活用されているのか。

顧問：わからないが、おそらく次の審査員を決めるときに参考にされるのだろう。

委員長：我々としても何か具体的なことを考えないとイケないと思うが。

委員：先程も言ったように、これまでに部会でヒアリングやアンケートもしてるので整理をしてほ
しい。

委員長：全体的なものではなかったか。

委員：審査の具体的なものだった。

事務局：自分達も一緒にやっているということから、よりよい審査のためにということが多かった
と思う。ここにきて審査する側とされる側という意識がだいぶ強く出てきてしまって、その辺が
懸念されている。

委員長：審査した人が自己評価するのはどうか。必ず審査の後に自己評価書を提出する。評価のや
り方として、まず自己評価書を作って外部評価をするのが基本的なスタイルですから。

委員：審査報告書以外の何かを共有するのは良いと思う。

事務局：今日のところは審査員の評価をしていくという方向だけ確認していただければ、どうい
う形でやっていくかは今後継続していただければと思う。

委員長：審査のやり方が今度少し変わってくるので、それと関連してどのように自己評価をすれば
良いか、また今後議論していくことでよろしいか。

<2018-2019年度日本ジオパーク委員会委員、調査運営部会部会員の決定>

委員長：議題4の2018-2019年度日本ジオパーク委員会委員、調査運営部会部会員の決定について、
まとめて説明を。

事務局：日本ジオパーク委員会委員ということで、会則第5条第1項第1号から第9号に規定され
ている委員の選出になる。資料3に10名の委員候補。この委員会で次期の委員を選任していただ
きたい。資料4には運営部会部会員候補。調査運営部会設置規程第2条第1項第1号と第2号か
らなるもの。第1号は学会からの推薦。学会から7名が推薦されている。第2号の公募による部
会員候補6名。3/1までの公募に応募のあった方々。計13名の中から部会員を選任いただきたい。
なお、学会からの推薦に当たって、日本地質学会から要望があった。日本ジオパーク委員会の会
議にオブザーバーとして参加したいということ、公募になっている部会員に4名の推薦があった。
3/1を過ぎていたことと公募の要件に該当する方がいなかったため、今回の推薦にあたっては候補
には入らないということで了解をもらっている。今後の推薦・公募にあたっては検討していく必
要があると思う。5名の方を部会員に入れてほしいとのことで連絡があったが、各学会に1名の
割当をしているので、1名だけということで1名を推薦してもらった。他の4名に関しては、公

募要件を満たさない。各ジオパークでの経験年数、もしくは委員の経験、専門の分野をお持ちの方ということで、そのうちの2つを満たす方が要件になるので、この4名の方は該当しなかったもので候補に入っていないということ。

委員長：経過説明ですね。

事務局：要望があったという報告。

委員：地質学会としては4名推薦として出したいという話になった。全体枠もなかったの、そのようになった。

委員長：次期の委員会メンバーを決めないといけないが、定員の考え方は？

事務局：定員はない。会則上は、1号から9号までの中で挙げられる者の中から委員長が委嘱することになっている。

委員：どういう経緯でこの候補に？

事務局：昨年12/22に会則改正を議論いただいて詳細については正副委員長に一任という形にしていただいていた。12月の段階で全てまとまればよかったが、議案の不備や学会推薦と公募との関係等あって最終的な調整を正副委員長に一任いただいた。その後、形が整い、各関係機関にお願いをして本日までに候補を拾うという前提だったので時間的にかなりタイトだった。正式な文章が必要な所には委員長名で文書を送り推薦をしてもらった。そうでないところについては関係機関で候補者を挙げてもらったり、機関毎にレベルの違う対応をした。最終的には選任してスタートするところを最優先に考えて今回の推薦をお願いした。

委員：関係機関より推薦された者というのは、どういう機関だったのか。

事務局：4の自然保護関係機関はIUCN国際自然保護連合日本委員会に依頼した。文化財保護関係機関は、文化庁にお願いをした。観光分野は、観光庁から推薦をいただいた。

委員長：どういう順番で進めていくのか。

事務局：今回の委員の選任は、現委員長の名前で、委嘱の依頼を年度内に行う。5/19の委員会で正副委員長の互選をしていただく。

委員：打診してスムーズに行ったのか？

事務局：基本的には推薦をいただいた方にはお会いをして、直接、日本ジオパーク委員会の使命、役割について説明をした。各委員会の先生方は細かいところを心配していた。忙しい方が多いので、会議に出れるかと含めて説明をした。

委員長：ジオパークとは何ですかという質問はなかったか。

事務局：なかった。ジオパークに対してはご存知でした。

顧問：全体として、部会にも考古学がいなくなるがその辺はどうなるか。

委員：公募での告知はホームページだけで、あまりに知られていなかった。公募枠で言えば、しかるべき依頼があれば、協会等から出せたと思う。私自身は4月から職場が変わるので、できるか否かわからない。2年後とか、できればやりたい。

委員長：会議の途中で新しく委員を任命することも可能ですね。必要になれば、足りない分野があれば追加も可能。

委員：学会の支援組織ができれば、途中で推薦いただくことも可能。

事務局：推薦はしていただけるが、決定は委員会において。

委員長：機能としては追加できる。特に異論がなければ、この10名を委嘱するとういことによろし

いか。

顧問：オブザーバーの参加はどうか。

委員長：会則上規定がある。「委員長は必要があると認めた場合は、委員会に属する委員以外の者を委員会に出席させ、関係事項について助言および説明を求めることができる」という条項が7条の5にある。適宜新しい委員会で議論されればよいと思う。

委員：基本的には委員会は承認機関なので、実践的な議論は調査運営部会になるので、そこに来てもらった方がよいのではないかと。

委員：コンソーシアムを地質学会で引き受けましょうという話があるので、委員会の状況を知っておく必要があるのではないかと。

事務局：日本地質学会には IUGS との関係もあるので、世界の申請書類に関する学術的な評価をお願いするという事で、外部の委員会ではあるが学術コンソーシアムという組織を立ち上げていこう。これについては、地質学会に事務局的な機能をお願いしたいという話をさせてもらった。その中で地質学会としては経費的な負担もちゃんとしてもらえるのかという話もあり、金額はまだ今後の協議だが、お世話をしましょうと決めていただいている。まずは事務局的な役割を担いましょうという返事はいただいている。

委員：地質学会のジオパーク支援委員会が窓口になって、地質学会で受けられない話は他の学会が受けて査読してもらう窓口になるということか？

委員：地質学会の支援委員会が窓口という話はまだで、学会として受けましょうと。執行理事として、そういう人がいないと情報が理事会レベルで情報が伝わっていかないのではないかと。学会としての窓口という意味です。

委員長：どういう立場で出ていただくかは議論した方がよい。顧問に関しては？

事務局：会則にあるように必要に応じるところの中で委員長が判断してご出席いただくもの。今までの会則にも定義はない。

委員長：必要に応じてということになると。

委員：あまり委員会が膨らむようなことをすることを前提で議論をするのは得策ではないように思うが。

委員長：今日は顧問が3人来ておられるので一辺クリアしてよろしいかという話。特に規定がなければ自動的に決まるわけではないので、委員長が決めることであろうということ。必要に応じて部会を置くというのは、調査運営部会というものを置くということ。資料4をお諮りしますが、いかがか。資料4のメンバーに対しても何かアクションは取られたか？

事務局：部会の学会推薦の7名について各委員、直接学会の方に説明して推薦をいただいた方で、学会推薦と言うことでご本人には特に誰も連絡を取っていない。

委員：公募要件は事前にどこかで発表されていたか。

事務局：2/13にWebサイトにUPした公募案内に、要件は出しているが、その前の段階で委員にはお諮りしている。募集の要件として、次の2つに該当する者。①日本ジオパーク及びユネスコ世界ジオパーク認定地域において実質的な活動を担っている事務局員又は専門員で、その経験が4年以上になる者、②以下に示す各分野の専門的経験（複数）が5年以上あり、日本ジオパーク及びユネスコ世界ジオパークの発展に貢献している者<地質遺産地質保全持続可能な開発、観光開発・振興、環境問題、地域社会・市民活動・地域づくり、地球科学の普及・広報、教育、防災・

減災>、③日本ジオパーク委員会委員等経験者並びに世界ジオパークネットワーク及びアジア太平洋ジオパークネットワークにおいて何らかの役職経験者。公募の6名は、2つ、ないし3つに該当している。

委員長：スタートのメンバーであるという認識でよろしいか。将来追加することが可能であるという認識でよいですね。

事務局：資料3についての委員については4/1になるが資料4の方では今日から2年間なので間違っている。訂正してください。現段階からスタートさせていただきたい。

委員長：委嘱は4/1付でいいのでは。5/19までは現在の委員長の名前でやらなくては仕方ないのでそうしましょう。規則の前に社会通念があります。部会員は決めておくということによろしいか。

[異議なし]

<その他>

事務局：32回の議事録も作成中。3月中にはメールで確認をお願いしたい。新しい事務局員と3月いっぱい終了の職員から挨拶を。

事務局：先月から事務局に入った。ジオパークは、知識は偏っているが、個人的に離島が好きなので、サイトが引かかかって見ている。行ったことがあるのは伊豆大島、行ってみたいのは飛島とか。まだ分からないことだらけ。よろしくをお願いします。

事務局：1年8カ月お世話になった。内示等まだわからないので分かりましたらご連絡します。大変お世話になりました。

委員：欠席している委員から、委員は交代するがジオパークには関わらせていただきたいというメッセージ。私自身は職場が変わるのでどう動けるかまったく分からない。公募に応募したかったが。もし絡めるようなら、応募するかもしれないので引き続きよろしくお願いします。

委員：新JGCが報告だけを聞いて、ジオパーク用語が理解できるかどうか、今までのメンバーがフォローするとはいえ心配である。

委員：ぜひ意識して積極的なかわりを持っていただきたい。

事務局：委員と面談したがジオパークに関する見識も結構あって、早く審査を見ていただきたいと思っている。部会に参加いただくのも、部会で検討をしていただければ。研修会は委員の方にも案内する。

委員：7年委員をやった。大変好きになって、ジオパークは業界にとっても、下支えする1つの活動でぜひともこれから発展させていただければ。スポンサーが欲しいときには、お声がけいただければ、できる限りでやっていきたい。

顧問：8年間、最初は委員長と審査をして右も左も分からない状態だった。今後新しい形になっていけばいいと思います。ありがとうございました。

委員：2年半お世話になりました。審査で地域の方と、事務局が苦労としている様子とか、現地で一生懸命やっている人と会うことで勉強になった。結果は結果として受け止めて新たなスタートを見ていくと、ありがたいと思う。学会の役職が変わるので、直接ジオパークに関わることはないが、地質学会としてもジオパークを支援していきたい。

委員長：私もこれで最後になる。10年間お世話になった。俳句の会でそのうち、全部のジオパークを回りたい。ありがとうございました。